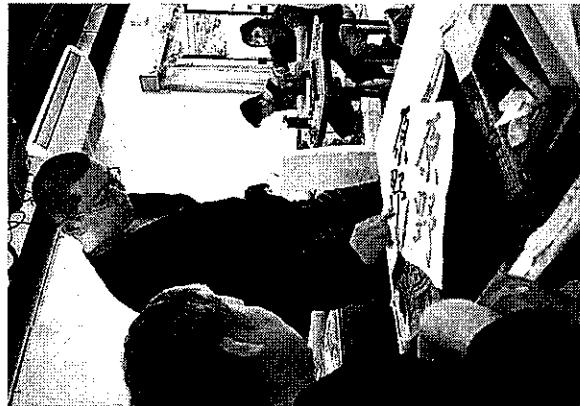


କାନ୍ତି

団地の建て替えを機に、子育て世帯の人居が一部で始まった。コミュニティの活性化には若い人材が欠かせないが、成熟した団地社会においてまで深くかかわってゆけるのか。世代隔たりやアラフ超えて暮らしを再建しつつ、新旧住民が一步を踏み出す。

關化洞立

都市再生機構（UR）の  
賃貸団地「グリーンタウン」  
光ヶ丘（千葉県柏市）。  
1957年に入居が始まり  
たニュータウンの草分け  
だ。今、高齢者中心の自  
治会に、新たに約70世帯が  
加入了。団地建て替えに  
伴い、URが売却した土地  
に建てられた民間アソシエ  
ーションの住民で、多くが平賃で  
世帯。これまで前にも2つ  
のアソシエーション（計約340  
戸）が完成しており、専業  
が自治会に加入している。  
団地の行事はがらりと変  
わった。担当手が不足し、  
近隣の大学生の手を借りた  
こともあるが、しかし、「も  
つと担当したい」と声が上がる  
をほど。自治会役員の小森  
聰司さん（38）は「アソシエ  
ーション住民だけで子育て向け  
のイベントを開催するのは  
大変。自治会に参加てきて  
よかつた」。

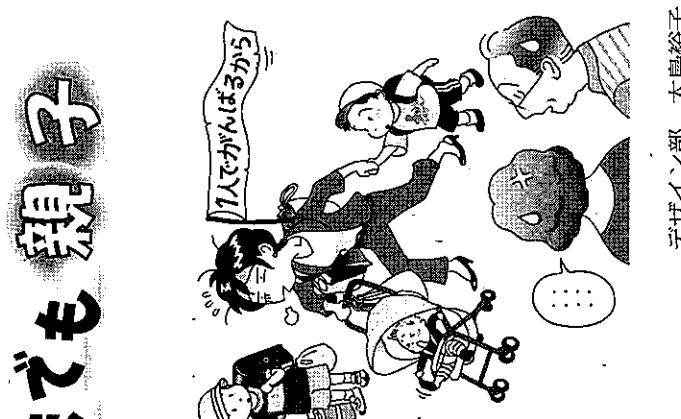


2008年冬、会社員の渋谷美和さん(36)は産婦人科で待望の3人目の妊娠を告げられた。だが1つ気がかりがおつた。それは父(69)と母(67)にどう伝えるかじっくりいた。

両親とは同じアハモアの連う際に住み、長男(6)と次男(3)の育児を手伝ってもらってきた。長男が生まれたときは、出産後5ヵ月で職場復帰した美和さんには代わり、1歳で保育園に入るまで両親が預かってくれただけだ。だが、夫婦ではもう一人はしこん話していいたが、両親にはその思いを伝えていかなかつた。

妊娠は自分で伝えるつもりだつたが、息子たちは先に語ってしまった。寝耳に水ばかりで、両親は彼らの中

親に子育ての手を借りる



自分でやる意地張ったが

ていた。育児休業制度を控えた今年3月に夫が海外赴任を打診されたのだ。せつかくのチャンス。夫が単身赴任し、3人の子育てを美和さんが担うことにした。

育休復帰当日。今春小学校に上がった長男は一人で登校した。次男と長女は保育園に預かってもらう。ただ同じ園に入れなかつたので預け先は別々。2つの園を経由するビ自宅から駅まで1時間弱かかる。長女をベビーカーに乗せ、次男の手を引く。残つた片手と肩に2人の子どもの荷物ビビジネスバッグを抱えると手いっぱいだ。

数日後、見かねた父が「次男はおれが送つていこう」と声を掛けてきた。「一人でいるのが嫌な顔を

たもの、やつぱり無理だった。素直に言えた。母も週に2~3回、美和さん親子4人のために夕食を準備して下れることになつた。

内閣府の04年度国民生活選好度調査によると、子育てに手助けが必要になつた場合、「自分の親」に頼るケースが最多の69・9%に上つた。育児休業制度の拡充など子育てしやすい環境が整つてきたとはいえ、両親の存在は大きい。

美和さんは両親に話すのが先延ばしになつたことを反省している。「懸念やそじらじらな手伝つてくれるだらうじう甘えもあつた」と打ち明ける。でも結構負担を掛けたならば正直に話し合つておけばよいかといふ感想が。

30代・学生が力

連報への賛同をお約束ください。(FAX 03・6256・28009、電子メールseikatsu@nex.nikkei.co.jp)

だった」(明舞まちづくり推進協議会の岡松治利会長)という。今も活動するのはひまわり会のみだ。

ひまわり会は店で屋食を出すだけでなく、配食サービスも展開。1日120食を提供し地域の食を支える。入江一喜代表(80)は「『ひまわりのおかげで助かっている』という声が広がったからこそ、地域に受け入れられた」と振り返る。

明舞団地の再生にかかわる特定非営利活動法人(NPO法人)、神戸まちづくり研究所の東実真紀さんは「高齢化で再生の担い手が不足し、住民だけでは限界がある」と指摘する。新旧住民と外部の繋がりが、団地の風景を変える。

日本住宅公団(現都市再生機構)が団地造成を始め、1950年代半ば当時、公団が採用した間取りは2DKだ。家族が集う場所で複数を分けるため、ダイニンングが設けられたり、LDKが多いという。分譲された中古団地では、新築同様にリノベーション(大規模な改修)をして、入居する子育て世帯も増え

「DK」などいう表記は、公論が初めて使つたのが、この辺りからである。中古物件改修子育て世帯が、コストでコアティカルな「DK」キッチンが設けられている。リバーシブルをアンドテコ

たのもだ。  
（東京都道区）では、乳幼児を持つ30代の夫婦からの問い合わせが多くなっています。同じく「寝がまく・子守もん」を安心して選ばせられる環境についた。その後「LDK」が境にひかれるケースが多くなったが、少子化など一世一代にしてくる。

图 6-6-10 热电偶的校验

連絡くらうの裏見やお詫び  
だね。(FAX03・66  
56・28009'電子メール  
seikatsu@nex.nikkei.co.jp)

井道協議会の岡村浩平会長) ひこう。今も活動するのはひまわり会のみだ。

ビスも展開。1日120食  
を提供し地域の食を支え  
る。入江一真代表(80)は  
「『ひまわりのおかげで助

兵庫県明石市と神戸市にまたがる明石舞子団地（明舞団地）。活性化に向け、兵庫県がNPOを空き店舗に誘致した。03年、健康に配慮した食事を提供する「NPOひまわり会」など3団体が活動を開始したが、当初は他の商店との関係が良好とはいえなかつた。既存の組織には『町を変えてきた』というブランドがあり、新旧の組織を融合させるには時間が必要かっている』という声が広がったからこそ、地域に受け入れられた』と振り返る。明舞団地の再生にかかわる特定非営利活動法人（NPO法人）、神戸まちづくり研究所の東末真紀さんは「高齢化で再生の担い手が不足し、住民だけでは限界がある」と指摘する。新旧住民と外部の懸念が、団地の風景を変える。